

日蓮大聖人御書全集

はくまいいつびようごしよ

白米一俵御書

新版  
2052  
〜  
2054

はくまいいつぴようごしよ

# 白米一俵御書

こうあんき

弘安期

はくまいひとたわら

毛 芋

一

俵

川 海苔

一

籠

おん 使

白米一俵・けいもひとたわら・こうのりひとかご、御つか

送

そうろう

いをもつて、わざわざおくられて候。

ひと

ふた

たから

いち

ころも

に

じき

きよう

人にも二つの財あり。一には衣、二には食なり。経に

い

うじよう

じき

よ

じゆう

うんぬん

もん

こころ

しよう

云わく「有情は食に依つて住す」と云々。文の心は、生

もの

ころも

じき

よ

住

もう

こころ

うお

ある者は衣と食によつて世にすむと申す心なり。魚は

みず

住

みず

いえ

き

ち

うえ

生

そうろう

ち

たから

水にすむ、水を宅とす。木は地の上において候、地を財

ひと

じき

しよう

じき

たから

命

もう

とす。人は食によつて生あり、食を財とす。いのちと申す

もの いっさい たから なか だいいち たから さんぜんかい へんまん  
物は、一切の財の中に第一の財なり。「三千界に遍満する

も、身命しんみょうに直するもの有ることなし」ととかれて、三千 さんぜん

大千世界だいせんせかいにみてて 候 財も、いのちにはかえぬことに 候 そうろう

なり。されば、いのちいのちはともしびともしびのごとし。食じきはあぶらの 油

ごとし。あぶらあぶらつくればともしびともしびきえぬ。食じきなければいのち 命

絶 たえぬ。

一切いっさいのかみ・仏ほとけをうやまいたてまつる始めはじめの句くには、

「南無なむ」と申す文字もんじをおき 候そうろうなり。南無なむと申すはいかな

ることぞと申すに、南無なむと申すは天竺てんじくのことば言葉にて 候そうろう。

かんど にほん

きみよう

もう

きみよう

もう

わ いのち

漢土・日本には「帰命」と申す。帰命と申すは、我が命を

ほとけ たてまつ

もう

わ み

ぶん したが

仏に奉ると申すことなり。我が身には分に随つて

さいし

けんぞく

しよりよう

きんぎんとう

持

ひとびと

たから

妻子・眷属・所領・金銀等をもてる人々もあり、また財な

ひとびと

たから

たから

いのち

もう

たから

過

き人々もあり。財あるも財なきも、命と申す財にすぎ

そうろうたから

そうら

古

しょうにん

けんじん

もう

て候 財は候わず。されば、いにしえの聖人・賢人と申

いのち

ほとけ

進

ほとけ

成

そうろう

すは、命を仏にまいらせて仏にはなり候なり。

せつせんだうじ

もう

ひと

み

き

任

はちじ

いわゆる、雪山童子と申せし人は、身を鬼にまかせて八字

習

やくおうぼさつ

もう

ひと

ひじ

焼

ほけきよう

をならえり。薬王菩薩と申せし人は、臂をやいて法華経に

たてまつ

わ

ちよう

しょうとくだいし

もう

ひと

て

皮

剥

奉る。我が朝にも聖徳太子と申せし人は、手のかわをは

ほけきよう 書 たてまつ てんじてんのう もう こくおう むめいし

いで法華経をかき奉り、天智天皇と申せし国王は、無名指

もう 指 焚 しゃかぶつ たてまつ けんじん しようにん

と申すゆびをたいて釈迦仏に奉る。これらは賢人・聖人

われ かな そうろう

のことなれば、我らは叶いがたきことにて候。

ほとけ 成 そうろう ほんぶ こころざし もう もんじ

ただし、仏になり候ことは、凡夫は 志 と申す文字を

こころ得 ほとけ 成 そうろう こころざし もう 何 ごと いさい

心えて仏になり候なり。 志 と申すはなに事ぞと委細

勘 そうら かんじん ほうもん かんじん ほうもん もう

にかんがえて候えば、観心の法門なり。観心の法門と申す

何 ごと 尋 そうら ひと 着 そうろう ころも

はなに事ぞとたずね候えば、ただ一つきて候 衣を

ほけきよう 進 そうろう み 皮 剥 そうろう 飢

法華経にまいらせ候が、身のかわをはぐにて候ぞ。うえ

世 放 今 日 いのち 継 もの 無

たるよに、これはなしてはきよりの命をつぐべき物もなき

に、ただひとつ 候そうろうごりようを仏にまいらせ候しんみようが、身命しんみよう

を仏にまいらせ候ほとけにて候そうろうぞ。これは、薬王のひじをややくおう 譬譬 焼焼

き雪山童子の身を鬼にたびて 候せつせんどうじにもあいおとらぬ功德くどくに

て候そうらえは、聖人の御ためには事供しょうにんよう、凡夫のためには理り

くよう、止観の第七の観心の檀はら蜜と申す法門ふかなり。

まことのみちは世間の事法せけんにて候じほう。金光明経には

「もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法すなわなり」ととかれ、

涅槃経には「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説ねはんぎようにして

外道の説にあらず」と仰せられて 候いっさいせけんを、妙楽大師、法華経げどう

を、妙楽大師、法華経おほ

を、妙楽大師、法華経そうろう

を、妙楽大師、法華経みようらくだいし

を、妙楽大師、法華経ほけきよう

を、妙楽大師、法華経きようしよ

を、妙楽大師、法華経ぶつせつ

を、妙楽大師、法華経ぶつせつ

を、妙楽大師、法華経ぶつせつ

の第六の巻の「一切世間の治生産業は、皆実相と相違背せ

だいりく まき

いっさいせけん

ちせいさんぎよう

みなじつそう

あいいはい

ず」の経文に引き合わせて、心をあらわされて候には、

かれがれ

にきよう

じんしん

きようぎよう

か

きようぎよう

彼々の二経は深心の経々なれども、彼の経々はいまだ

こころ 浅

ほけきよう

およ

せけん

ほう

ぶつぼう

よ

心あさくして法華経に及ばざれば、世間の法を仏法に依せ

知

そうろう

ほけきよう

せけん

ほう

ぶつぼう

てしらせて候。法華経はしからず。やがて世間の法が仏法

ぜんたい

しゃく

そうろう

の全体と釈せられて候。

にぜん

きよう

しんしん

こころ

ばんぼう

しよう

たと

こころ

爾前の経の心々は、心より万法を生ず。譬えば、心は

だいち

そうもく

ばんぼう

もう

ほけきよう

大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はしか

こころ

だいち

だいちなわ

そうもく

らず。心すなわち大地、大地則ち草木なり。

にぜん きようぎよう こころ こころ 澄 つき こころ

爾前の経々の心は、心のすむは月のごとし、心の

清

はな

ほけきよう

つき

こころ

はな

きよきは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、花

こころ

もう

ほうもん

こそ心よと申す法門なり。

知

はくまい

はくまい

これをもつてしろしめせ、白米は白米にはあらず、すな

いのち

わち命なり。